

【研究ノート】

雪舟の宇宙樹 — 雪舟筆『天橋立図』を読む —

京都中京の美術印刷の老舗、株式会社便利堂の玄関ホールに、自社のコロタイプ印刷による雪舟筆『天橋立図』の大きな額が掛かっています。それはじつに精巧な原寸大の複製であり、本物からうける印象とほとんどかわらないほどの代物です。複製画とはいえ、雪舟画の真髄をよく伝えています。

わたしは、最近、雑誌『大和文華』の編集の打合せのために便利堂へ行くことが多くなりました。先日、便利堂にうかがったとき、作の担当者を待つ間、いつも見馴れた複製『天橋立図』を、ぼんやりと眺めていました。そのとき、画面右下の隅のところから、不意に、真っ黒い墨汁を落してできた斑点のようなものが、わたしの眼の中に飛び込んできました。その斑点は、二つの島影らしきもので、左のものには「冠嶋」、右のものには「クツ嶋」と、文字が書き入れられてありました。

この二つの黒い島影は、『天橋立図』の中では周縁の、しかも隅っこの小さな景物にすぎません。しかし小さなものとはいえ、輪郭線や皴法を用いない表現は、雪舟にしては異常です。それは画面構成上はたして必要なものなのか。わ

たしには、この画の特質である確固たる統一感を脅かす得体の知れない侵入者のように思われてなりませんでした。雪舟は、単に実景としての島影を描いたのであろうか。そうではあるまい。これには何か深い意味が隠されているのではないか。ますますその黒い斑点が異様なものに見えてきました。

さて、丹後宮津の天橋立は古来、観光の名所としてあまりにも有名であります。雪舟の『天橋立図』がそのイメージ作りに果たした功績は、はかりしれないものがあります。

この画は、天橋立を中心に、右に府中の籠神社、世野山成相寺、左に智恩寺、奥に岩滝の村落、前に栗田半島の低い山並みを包んだ実景が表されています。おそらく橋立の東にある栗田半島に、想像上の視点を置き、成相寺の方向を見た景に基づいて、多少変更を加えて、鳥瞰図的に構成したものと考えられてきました。また図中の景物によって文亀元年(1501)から永正4年(1507)までの光景とわかる雪舟の最晩年、八十歳代の作というのが定説になっています。

近年、畏友の高見沢明雄氏は、この作品について山水画としての

構成分析を行い、中国画の構成を下敷きにしなが、部分として把握した実景を再構築したのが、雪舟の実景図であると言っています(『雪舟筆天橋立図について』『美術史』107号)。また大西廣氏は、本紙のたくさんの不規則な紙継ぎに注目して、まず府中・世野山・橋立の中心部を描いた後に、画面の左側と下側に紙を継ぎ足し、宮津湾と山並みを描き足したのではないかと、興味深い新説を提示しました。この説は高見沢氏の考察によって見事に証明されました。

ところで、雪舟は図中にたくさんの文字を書入れておられます。その文字を拾っていきますと、世野山成相寺、今熊野、大谷寺、慈光寺、十刹安国寺、諸山寶林寺、北野、国分寺、大聖院、正一位籠之大明神、一宮、不口、忍橋、高(扇)橋、嶋堂、辨財天、千歳橋、通堂、橋立、大松、冠嶋、クツ嶋と、二十二の名称が記入されています。しかし有名な文殊信仰の「智恩寺」の書入れはありません。この景物の名称の書入れは、すでに熊谷宣夫氏等によって指摘されていますが、「西湖図」「金山図」などの先例に倣ったものでしょう。

この名称の書入れについて、一般に「実景説明」のためと、あたかも観光地図のように解釈されておりますが、それだけなのでしょう。わたしは、名称を書入れる行為そのものに、もっと深い意味があると考えます。

中世の人たちは、「ものの霊」や「地霊」に対し、後世の人たち以上に畏怖の念を抱いておりました。中世の旅といえ、それは名所旧蹟、つまり歌枕を訪ねることとし

た。各地の有名な寺社への参詣も同様でした。つまり、その土地の霊に挨拶に行くのが目的でありました。かれらは、土地の霊につながり、文学の伝統につながりたくて、わざわざ赴いたのでした。後世の芭蕉の「奥の細道」の旅は、そのような中世の旅の名残りといえます。「天橋立」を訪れ、それを描いた画家も、その土地の歴史と風土のあわれを、古人の心に立ち入って、確かめようとしたのではないのでしょうか。雪舟の目は、古人の目を借りて「天橋立」を見ていたのではないのでしょうか。そして雪舟は、そのつながりを確認するかのよう

に、訪れた土地の名前を一つ一つ書入れていったのではないのでしょうか。『天橋立図』の名称の書入れを調べていて、面白いことに気付きました。それは、固有名詞の中に一つだけ普通名詞に近い名称があることです。橋立の付け根にあたる場所(現在の江尻あたり)、宮津湾側の浜に松林から少し離れて一本の松の老樹があり、「大松」と書かれているのがそれです。「大きな松」とも読むことができます。現在では、この「大松」について確かめることはできませんが、当時、特別に意識された松の樹であったからこそ、書入れたにちがひありません。その老松の下に立って、「大きな松」と感じた雪舟の実感が伝わってくるようです。この画の中で、とくにその場所は、雪舟の存在を強く感じさせる処です。

この孤立した磯馴松は、画面全体からすると、決して大きな描写ではありませんが、濃墨で描かれているので、見る者の視線を強く引きつけるものをもっています。前の黒い二つの島影と同じです。この「松」と「島」とは、お互いに強い力で引き合っているように、わたしには見えます。

さて、天橋立は、府中の江尻の浜から南対岸の文殊(智恩寺)に向かって突き出した砂嘴で、宮津湾の外海と内海の阿蘇海とに分けます。その砂嘴上の松並木は「六里松」とよばれました。『丹後国風

天橋立図 雪舟筆 紙本墨画淡彩 90.2×169.5cm 京都国立博物館蔵



栗田半島から見た沓島・冠嶋(右)



土記」逸文に、「^{くにうみ}国生みまし大神、伊射奈芸命、^{あま}天に通ひ行でまきむとて、^{はし}橋を作り立てたまひき。故、^{はし}橋立と云ひき。神の御寝るませる間に^{たもと}仆れ伏しき。」とあります。神々が天へ昇り降りする「^{はし}橋立」、つまり梯子のようなものがあり、神が寝ている間にそれが倒れてできたのが現在の「天橋立」というのです。天橋立は、この土地の人間にとって「^{かみ}神の住み給う処」と信じられてきました。

この天と地を結ぶ「天橋立」は、『古事記』の「^{しま}島々の生成」にでる「^{あま}天御柱」のバリエーションの一つといえます。これは、「^{あや}聖なるもの」が降臨し、宿るところの「^{あま}宇宙樹」あるいは「^{あま}世界軸」(M・エリアーデ『^{あや}聖と俗』)と見做すことができます。とすると、天橋立の付け根の江尻の浜にある「^{あま}大松」と書かれた異様な孤松は、「天橋立」に代わるもの、つまり神の^{あや}依代である宇宙樹として、神聖視されてきたものではないかと想像されます。

エリアーデによれば、宗教的人間にとって、空間は均質でなく、断絶と亀裂があるという。とすると「^{あま}大松」を空間の座標の固定点と考えますと、その地に立つ宗教的人間にとって、「天橋立」の空間は、超特異化された空間として感得されることとなります。そうしますと、この画の視点は、栗田半島の想像上の一点と考えるよりも、この「^{あま}大松」のところにありと考える方が、よいのではないのでしょうか。つまり、成相山や国分寺や智恩寺などの聖なるポイントは、この座標の固定点から放射状にあると見ることができそうです。実際との地理的位置関係が曖昧になっていることが指摘されていますが、そのように考えるならば、一応理解できるのではないのでしょうか。

この座標点(大松)から、東北東の方向、宮津湾の沖合はるか遠くに冠島と沓島の二つの島影をかすかに見ることができそうです。この二つの島は、「^{あま}常世島」「^{あま}雄島女島」「^{あま}沖の島」と呼ばれ、昔、男女の神がこの島に天降りして、夫婦の契りをむすんだ処と伝えられていま

す。冠島(無人島)には、^{あま}老人島神社があり、海部氏の祖神の^{あま}天火明命を祀り、海辺で生活する人々によって崇敬されてきました。またこの島は、丹後一宮の籠神社の奥宮としての「^{あま}沖の島」、つまり「^{あま}神体島」と見做されてきました。

この冠島と沓島は、実際は宮津湾内にはなく、若狭湾の只中にあります。ですから、それらが画の中に存在することは、地理的整合性を欠きます。また面白いことに、二つの島は、画面そっくりですが、左右がすっかり逆になっています。位置関係だけでなく、島影そのものが左右逆になっています。つまり二つの島の東の方向から見た姿として描かれています。かつて日本では、『^{あま}黒色』は、「^{あま}辺界の色」「^{あま}非日常の色」「^{あま}神秘の色」(服部幸雄氏『^{あま}辺界の色—黒の造形』)とされてきました。ですから、雪舟が島を黒く塗りつぶして表したのは、おそらく『^{あま}黒』の象徴性によって、その島を「^{あま}辺界の島」と暗示する意図があったからではないでしょうか。雪舟は、あたかも出雲の神の国引きのように、画中に二つの島を強引に牽き寄せていますが、そういうふうに解釈すれば、一応の納得が得られます。

『^{あま}日本書記』によりますと、^{あま}大國主命と一緒に国づくりをした^{あま}少彦名命は、最後に「^{あま}淡島」(沖の島)に至って、「^{あま}常世郷」へと翔んでいったとあります。また折口信夫は、「^{あま}神は海から来る」(『^{あま}春来る鬼』)と言っています。この二つの島が、「^{あま}沖の島」「^{あま}常世島」と呼ばれていたことは前に述べましたが、座標の固定点(大松)からその島を見る方向は、異方性をもっています。それは海の彼方、「^{あま}奥」への方向性を含んでいます。それは「^{あま}神の通路」に当たります。そういたしますと、雪舟は、ここで「^{あま}天橋立」(宇宙樹)とは別のもう一つの超越の座標軸を表しているのです。

雪舟の『^{あま}天橋立図』は、実景図であるとともに、自ら感得した神話的空間を表現したものといえるのではないのでしょうか。

(林 進)

季刊 美のたより No.89

平成元年 11月 17日

発行 大和文華館